

一二三之式

〔茶人大系譜〕千宗佐號天然、稱如心齋、又丁々軒、原叟男也、仕紀州、性敏而數奇、才秀於衆、嘗與弟

〔博道隨筆〕博道○板曰、今喫茶家七事とやいふ事なすに、其一事に十種の茶なる有、是は香より起

しとのみおもひしに、其事初めしは千の宗左なるものなせし、此事知りてなせし歟、

〔茶道筌蹄〕七事別に七事の書あり、故に略す、

七事の内、回花、回炭、茶カブキの三事は、むかしよりあり來る者也、其餘の四事は、如心齋新に製す、六事出來の後の碧嵐の語に、七事隨身といふにもとづき、樂人の及第より工夫をなし、一二三の式を製し七事の數に合す、

花月 始は花鳥といふ、四季の花鳥の札にて主客を定む、春は梅に雉子、夏は桐に鸞、秋は菊に鶴、冬は松に鷹の札を用ひたりしを、後四季通用に花月に定む、此とき花月の二字を書して花鳥の札に換ふ、

旦座 趙州の語に、旦座喫茶去の語をかり用ゆ、

茶カブキ 假名にて書べし、大折居は五寸四方、總て白紙にて金砂子、小折居は表淺黄生漉、裏金布目、大サ一寸五分四方、小は花月に用ゆ、

一二三 月は上の上中下、空は中の上中下、花は下の上中下、客の札は亭主に疎粗ある歟目のおよばざるに用ゆ、硯蓋は十種香箱のフタをかり用ゆ、

〔茶道七字要書〕廻花之式

一時節之花品々、花臺ニ組、水次之上ニ茶巾ヲ疊ミ置、花切小刀何レモ花臺ニ取ソエ持出、花一遍二遍、或ハ何遍ニテモ、各花ヲ入替ル也、

但茶湯ニ不用、花モ時宜ニヨリ用ユ、或ハ紅葉梅モトキノ類、